

富山大学 教養教育院

令和7年度 第2回

FD研修会報告

Faculty Development Report

FD

REPORT

Liberal Arts and Sciences at **University of Toyama**

目次

1. 開催趣旨と総括	1
2. 開催要項	2
3. FDの様子	4
4. 講師への追加質問とその回答	24
5. 参加状況	27
6. 参加者アンケート集計結果	28

1. 開催趣旨と総括

令和 8 年度からの新教養教育の実施を目前に控え、第 2 回教養教育院 FD は、「新教養教育の理念およびシラバス」(第 1 部)と「学生を主体的な学びへと導くグループワークの実践報告」(第 2 部)の 2 部構成で実施しました。

第 1 部では、教養教育院副院長の杉森保先生より、新教養教育の全体像と、科目チームを軸とした運営の仕組みについて改めて説明をいただき、次年度(令和 8 年度)の授業運営に向けた共通理解を深めました。続いて、教養教育院の彦坂泰正先生より、授業実施の基盤となるシラバス作成の基本方針について、科目枠として共通に記載すべき事項と、サブタイトルの異なる科目などにおいて各担当者が工夫して記載できる事項を整理しながら、具体的な観点に基づいてご説明いただきました。

第 2 部では、都市デザイン学部の安江健一先生より、学生の主体的な学びを引き出すためのグループワークについて、設計及び進行の要点・留意点を概念面から整理してご提示いただき、人文学部の大西宏治先生より、授業内での具体的な活動や問いかけの工夫、成果物(アプトプット)へつなげる手立てなどについて、実際の授業実践に基づく報告をいただきました。

本 FD は、教養教育の理念及び運営の枠組みに関する共通理解を改めて確認するとともに、アクティブラーニングが求められる今日の大学教育において重要性が高まるグループワークの設計・運営に関する実践的知見を共有する機会となりました。第 1 部では、新教養教育の科目群、ならびに各科目を実施・運営していくうえでの重要な指針を改めて確認したことで、次年度(令和 8 年度)の準備を具体的に進めるための共通の土台が整いました。また、第 2 部は、新設科目「導入学修 A」の実施・運営に向けて、すでに企画している第 3 回教養教育院 FD (「グループワーク・ファシリテーション実践型ワークショップ～“教える”から“共に学ぶ”へ～」)へとつながる重要な橋渡しとしての位置付けとなりました。

本 FD は、対面及び Microsoft Teams 会議を併用したハイブリッド形式で実施し、当日参加が難しかった教職員に向けて後日オンデマンド配信も行いました。結果として、計 61 名の教職員が参加及び視聴し、その内 39 名からアンケートを通じて本 FD に関する感想・コメントの提出がありました。

令和 7 年度教養教育院教育改善推進委員会委員長
福田 翔

2. 令和7年度第2回教養教育院FD 開催要項

テーマ「令和8年度新教養教育に向けた教育改革とグループワークを取り入れた授業デザイン」

1. 開催趣旨

近年、グローバル化の進展による社会構造の変化、学びの多様化、そして生成AIをはじめとするデジタル技術の急速な進展など、大学教育の在り方が大きな転換点を迎えています。こうした中で、学生一人ひとりが自ら考え、他者と協働しながら課題を発見・解決していく力を育むことが、教養教育においてこれまで以上に重要となっています。本学では、令和8年度からの新教養教育の実施を見据え、シラバスの刷新やグループワークの実施をはじめとした教育内容・方法の再構築を進めています。

本FDでは、第1部「新教養教育の理念およびシラバス」として、教養教育改革の背景を踏まえながら、科目の大括り化の考え方とその根拠、さらに各教員の分担体制や「科目チーム」、「科目群運営チーム」の仕組み、新しいシラバス作成の方向性について取り上げます。続く、第2部「学生を主体的な学びへと導くグループワークの実践報告」では、新教養教育科目の実施において重要な要素となるグループワークについて、その実践的手法や具体的な取り組み事例を紹介します。

令和8年度からの新教養教育の実現に向け、教員間で理念と実践の両面から理解を深めることを目的としています。

2. 開催日時

令和7年11月14日（金）13:00-15:00

3. 開催形式

対面及びMicrosoft Teams 会議を併用したハイブリッド形式

4. 開催会場

共通教育棟D棟 D11 番教室

5. 対 象

本学教職員

6. 次 第

(1) 開会挨拶・趣旨説明

福田 翔（教養教育院 教育改善推進委員長）

(2) 講演

第1部 新教養教育の理念およびシラバス（13:00-14:00）

13:00-13:25

「新教養教育の全体像としくみ：部会からチームへ」

講師：杉森 保（教養教育院 副院長）

13:25-13:30

質疑応答

13:30-13:55

「新教養教育科目のシラバスについて」

講師：彦坂 泰正（教養教育院 教授）

13:55-14:00

質疑応答

第2部 学生を主体的な学びへと導くグループワークの実践報告(14:00-15:00)

14:00-14:25

「学生の学習活動を促進させるグループワークの進め方」

講師：安江 健一（都市デザイン学部 准教授）

14:25-14:30

質疑応答

14:30-14:55

「グループワークの input と output」

講師：大西 宏治（人文学部 教授）

14:55-15:00

質疑応答

(3) 閉会挨拶

會澤 宣一（教養教育院長）

3. 令和7年度第2回教養教育院FDの様子

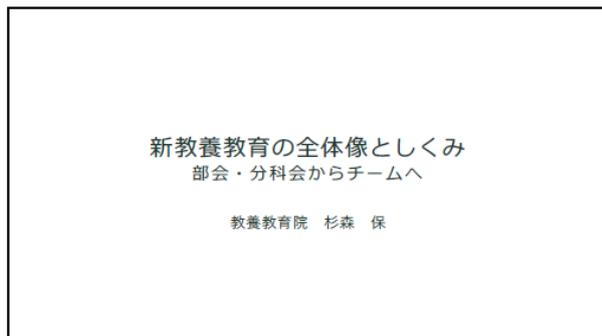
テーマ「令和8年度新教養教育に向けた教育改革とグループワークを取り入れた授業デザイン」

(1) 講演スライド資料 (PowerPoint 資料)

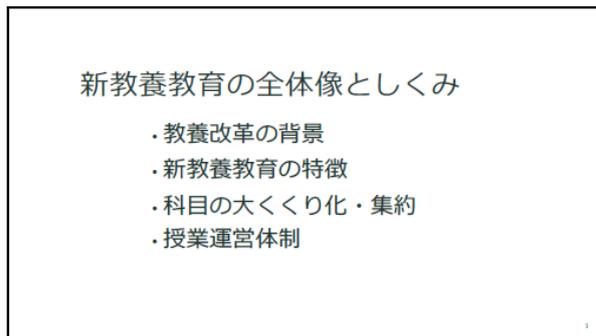
第1部 新教養教育の理念およびシラバス

「新教養教育の全体像としくみ：令和8年度を目前にして」

杉森 保 (教養教育院 副院長) 【資料：PowerPoint】



1



2



3

2040年に向けた高等教育のグランドデザイン(草案)【概要】

1. 教育研究体制 ー 多様性と柔軟性の確保 ー

2. 教育の質の保証と改善 ー 学びの質保証の確保 ー

3. 高等教育機関の連携 ー 多様な機関による多様な教育の提供 ー

4. 新教育体系の実現 ー 2025年の可視化と多様な学びの場の拡大と展開 ー

4

必要とされる人材像と高等教育の目指すべき姿

予測不可能な時代を生きる人材像

- 普遍的な知識・理解と汎用的技能を文理横断的に身に付けていく
- 時代の変化に合わせて積極的に社会を支え、論理的思考力を持って社会を改善していく資質を有する人材

学者者本位の教育への転換

- 「何を学び、身に付けることができたのか」+ 個々人の学習成果の可視化(個々の教員の教育手法や研究を中心にシステムを構築する教育からの脱却)
- 学習者が生涯学び続けられるための多様な柔軟な仕組みと流動性

5

高等教育(国公立)と大学の役割

2025(令和7)年 学習成果の保証と「質」

1. 質保証の目的：共通・専修と1年2月迄
 - ① 教養教育の保証委員会(国公立)及び(専修)専修学校等設置委員会(専修)で確認
 - ② 教養教育保証委員会にて確認(国公立) ③ 専修教育保証委員会にて確認(専修)
 - ③ 教養教育保証委員会にて確認(専修) ④ 専修教育保証委員会にて確認(専修)
2. 教養教育保証委員会(国公立) 専修と1年2月迄
 - ① 教養教育保証委員会にて確認(国公立)
 - ② 専修教育保証委員会にて確認(専修)
 - ③ 専修教育保証委員会にて確認(専修)
3. 専修教育の保証：専修と1年2月迄
 - ① 専修教育保証委員会にて確認(専修)
 - ② 専修教育保証委員会にて確認(専修)
 - ③ 専修教育保証委員会にて確認(専修)
4. 専修教育の保証：専修と1年2月迄
 - ① 専修教育保証委員会にて確認(専修)
 - ② 専修教育保証委員会にて確認(専修)
 - ③ 専修教育保証委員会にて確認(専修)
5. 専修教育
 - 専修教育保証委員会にて確認(専修)
 - 専修教育保証委員会にて確認(専修)
 - 専修教育保証委員会にて確認(専修)

6

分野別科目の大きくくり化 科目名によるくり上げ

・ねらい：学生基盤の知識の**俯瞰性**

科目の大きくくり化

例：人文科学分野

例：多文化、心理学、表現文化、歴史、芸術、哲学

例：5つから4選択

個別のコンテンツはサブタイトル
大きくくり科目名+サブタイトル

21

15

分野別科目の大きくくり化 科目名によるくり上げ

・ねらい：学生基盤の知識の**俯瞰性**

(抜粋) 教養教育新カリキュラム作成に関する補足説明
2023.05.31：教養教育従来編検討委員会
2023.06.07：中核2 本年度第2 回教養教育検討会
2023.06.13：令和5 年度第2 回教養教育検討会

科目の大きくくり化

大きくくり科目名+サブタイトル

1. なぜ大括り化を行うのか

- 科目を整理することにより、学生に身につけるべき能力をバランスよく構成し、明確化するため
- 複数の科目をまとめることで、学生に幅広い知識を修得させることができる。
- 個人に属していた授業を、複数の教員が分担して実施すること（チームティーチング）で、教育の質を高める。可能なものは共通化や映映化→教員負担を軽減すると共に、サブディカル体験の取得や教員退職後の継続性を推進する

22

16

分野別科目の大きくくり化 科目名によるくり上げ

・ねらい：学生基盤の知識の**俯瞰性**

科目の大きくくり化

大きくくり科目名+サブタイトル

メリット

- ディプロマ・ポリシーに合致した、教養の学修内容の幅広い確保。
- サブタイトル制度、新しいシラバス統一方針による柔軟さの中での統一（刷新、新旧交代も）。
- 企画、内容、教授法に繋がるティーチングアクティビティのシェア化のためのフレーム形成。
- クラス規模の緩和（各分野別単位数減）、およびクォーター制度導入による担当負担の柔軟化（例：Q1別分を第1Qと第2Qに、など）。

お願い

- シラバスの具体化についての検討への協力 等。

23

17

富山大学の教養教育改革【説明図②】刷新内容案

現在の教養教育科目構成

計画している教養教育科目構成

統合

多角

基礎

24

18

科目群のしくみ ～部会・分科会からチームへ～

これまでの運営体制

25

19

科目群のしくみ ～部会・分科会からチームへ～

令和8年度からの運営体制
サブタイトルがある場合

科目群運営チーム

科目A、B、Cのそれぞれが「大きくくり科目」に該当

26

20

科目群のしくみ ～部会・分科会からチームへ～

令和8年度からの運営体制
サブタイトルがある場合

科目群運営チーム

これらで科目Aの「科目チーム」を構成する

担当可能なが当該年度は担当しない教員

27

21

科目群のしくみ ～部会・分科会からチームへ～

令和8年度からの運営体制
サブタイトルがない場合

科目群運営チーム

これらで科目Dの「科目チーム」を構成する

担当可能なが当該年度は担当しない教員

28

22

科目群のしくみ ～部会・分科会からチームへ～

科目群運営チーム：科目群を統括。教養教育院の教員で構成する。

科目群：教養教育履修規則上の同一区分科目のあつまり（例：統合科目群など）

科目：成績表に記載される教養教育履修規則上の科目名称（例：文学の世界、サステナビリティ、人文と自然など）

科目チーム：同じ科目（サブタイトルを内包）を担当する教員の集まり。1人の教員が複数の科目チームに所属できる。年度が替わっても経験者はチームに属したままとし、チームに属していても必ずしも授業を担当するとは限らない。

31

23

科目群のしくみ ～部会・分科会からチームへ～

科目群運営チーム：科目群を統括。教養教育院の教員で構成する。

科目群：教養教育履修規則上の同一区分科目のあつまり（例：統合科目群など）

科目：成績表に記載される教養教育履修規則上の科目名称（例：文学の世界、サステナビリティ、人文と自然など）

科目チーム：同じ科目（サブタイトルを内包）を担当する教員の集まり。1人の教員が複数の科目チームに所属できる。年度が替わっても経験者はチームに属したままとし、チームに属していても必ずしも授業を担当するとは限らない。

科目チームリーダー：科目チームの教員集団を代表し、当該年度の科目チームについて状況の把握、情報の共有などを行う

32

24

科目群のしくみ ～部会・分科会からチームへ～

33

25

科目群③ 「社会的変化への対応」科目(1) 共通基礎科目

科目のねらい：大学での学習の基礎となる「論理力」を育み、管理する力（社会力）と「他者の考えを尊重し、自らの意見を押し通す力（コミュニケーション能力）」の習得を主眼とする。

34

26

科目群④ 「社会的変化への対応」科目(2) 選択基礎科目

科目のねらい：幅広い知識の獲得と「自ら学びを立てる力・応用的な能力（問題発見・解決力）」および「他者の考えを尊重し、自らの意見を押し通す力（コミュニケーション能力）」の習得を主眼とする。

35

27

科目群⑤ 統合科目

科目群の位置づけとねらい

37

28

「新教養教育科目のシラバスについて」

彦坂 泰正 (教養教育院 教授) 【資料: PowerPoint】

新教養教育科目のシラバスについて



教養教育院 彦坂泰正

スライド16枚

1

内容 2/16

- ・シラバスについての整理
- ・新教養教育のシラバス
- ・自然科学系科目でのとりくみ

2

教学マネジメント 指針 3/16

中央教育審議会大学分科会(令和2年) p.20

シラバスは、個々の授業科目について学生と教員との共通理解を図る上で極めて重要な存在である。米国では、教員と学生の契約書と理解されている例もある。単なる講義概要(コースカタログ)にとどまることなく、学位プログラムの「卒業認定・学位授与の方針」における当該授業科目の位置付けや他の授業科目との関連性の説明、学生が事前準備のための学修や事後の発展的な学修を主体的に行う上での指針とすることができる事前・事後学修の指示を含み、授業の行程表として機能するとともに、「何を学び、身に付けることができるのか(到達目標)を明確に定めることで適切な成績評価を実施するための基点としても機能するよう作成される必要がある。具体的には、

3

昨年度のFD 4/16

シラバス作成に関するFD

シラバス作成に関して、教育・学生支援機構の教員と学生セッションする場を設けます。令和7年度のシラバスを作成する中で、困っていること、分からないことがある方はぜひご参加ください。

第0回	2025年11月9日(木)	10:00~11:00	第1回	2025年11月10日(金)	15:00~16:00
ハイブリッド開催					
会場: 共通教育棟A棟4階 学務部会議室					
オンライン: Microsoft Teams					
■ 11月 開催先: 27272			■ 11月 開催先: 27272		
ID: 440 917 132 634			ID: 410 888 840 420		
Pass: K5TF8Z9W			Pass: PVE6Hd3		
講師	教育・学生支援機構	磯部 祐子 機構長	教育・学生支援機構	松本 馨 准教授	

4

「一般学修目標」の書き方 5/16

シラバス項目の記載方法と留意点 9

■授業のねらいとカリキュラム上の位置付け(一般学修目標)

- ・学生が授業の全体像を把握できるよう、授業の狙いや概要等について簡潔に記載。
- ・また、本学及び各部署等のCP・DPを踏まえた上で、この授業が学科や専攻等のカリキュラムの中でどのように位置付けられているのかなどを記載。
- ・「～するために、～を修得する」等、総合的な動詞を使用し、主語は学生にするのが好ましい。

【記載例】

- ・化学の面白さを体感し、研究への関心を高められるように、研究者が日常的に行う研究活動の一端を体験する。
- ・社会学への興味・関心を高めるため、フィールドワークを通じて社会学の研究プロセスを体感する。
- ・国内外の諸問題に対して経済学的手法による解決策を提案できるようになるために、現代の経済学に関わる議論を通して、基礎的な経済学の方法を修得する。

「シラバスに関するFD」の資料より

5

「達成目標」の書き方 6/16

シラバス項目の記載方法と留意点 10

■達成目標

- ・達成目標は、学生が授業終了段階で身につけるべき能力を指す。
- ・当該授業を履修し、学生がどのような能力、知識、技能を修得できるのか、イメージできるような、具体的かつ平易に記載。主語を学生とし、述語を「○○できる」のように記載。
- ・達成目標で設定した内容は、「成績評価の方法」に基づき、達成の程度を客観的に測定・評価することができるよう、「学んだ結果、何ができるようになるか」という評価可能な目標を具体的に記す必要がある。
- ・達成目標は、本学及び各部署等のCP・DPと整合性を保つ必要がある。

【記載例】

- ・与えられた課題からリサーチアクションを立てることができる。
- ・資料から抽出した情報を論理的に組み立てて説明できる。
- ・社会学におけるフィールドワークの手順を、自らの体験をもとに他者に説明できる。
- ・○○(実験器具名)を安全かつ適切に操作できる。

「△△について概説することを目的とする。」 ⇒ 教員を主体とする記載にしないこと。
 「△△を学ぶ。」 ⇒ 学んだうえで、何が身に付くかを記載すること。
 「△△を理解する。」 ⇒ 理解したかどうかは主観的なものであるため、より客観的な記載になるようにすること。

「シラバスに関するFD」の資料より

6

「成績評価の方法」の書き方 7/16

シラバス項目の記載方法及び留意点 18

■成績評価の方法

- 設定した「達成目標」に対する学修成果の達成度の評価方法及び具体的な判断の基準を記載。
- 成績評価の理由を学生に説明することができるかを念頭に、**実際の成績評価基準と、この項目の記載内容に齟齬がないよう留意。**
- 中間試験、期末試験、小テスト、レポート、グループワークなど具体的な方法を列挙し、それらの配分割合を記載。
- 達成目標に対する適切な評価方法（複数の評価方法を組み合わせるのが望ましい）とその配分割合の明記。
- 評語毎の評価基準については、成績評価分布にも留意。

「富山大学GPA制度に関する規程」一部抜粋

評語	評価基準	参考（100点満点での目安）
秀（S）	到達目標を達成し、極めて優秀な成績を修めている	90点以上
優（A）	到達目標を達成し、優秀な成績を修めている	80点以上90点未満
良（B）	到達目標を達成し、良好な成績を修めている	70点以上80点未満
可（C）	到達目標を達成していない	60点以上70点未満
不可（D）	到達目標を達成していない	60点未満

「シラバスに関するFD」の資料より

7

新教養教育科目のシラバス 8/16

授業依頼書シート

科目名	学修目標
ウェルビーイング	「自分の人生の設計や将来の目標について、ウェルビーイングの観点から、関連する主要な考えやスキルを習得し、その中で自分らしい生き方を模索し、実践する能力（コミュニケーション能力）」を養うこととする。
科目のねらい	「自分の人生を設計し、他者の理解によって協力を得る能力」を養うこととする。
科目の達成目標	(1) 主要な考えやスキルについて、関連する知識を身に付けることができる。 (2) 主要な考えやスキルを通じて見いだした問題について、多角的・複層的に分析し、解決策を提案できる。 (3) 問題や解決策の検討にあたり、他者の考えを理解し、意思疎通しながら自分の意見を主張できる。
成績評価方法	(1) 到達目標 (1) のうち主要な内容（スキル・知識の習得を含む）の習得に関する達成度（50%） (2) 到達目標 (1) のうち発展的な内容（スキル・知識の習得を含む）の習得に関する達成度（50%） にそれぞれ (2) および (3) に関連した達成度（20%）
アクティブラーニング	実施する
サブタイトル	
授業のめらい	達成
成績評価の方法	達成
アクティブラーニングの活用	達成

シラバス

授業のねらいとカリキュラム上の位置付け（一般学修目標）

達成目標

成績評価の方法

複数クラス開講では共通文言

8

R3年度までの自然科学系科目 9/16

物理の世界
化学物質の世界
自然と情報の数理
地球と環境
生命の世界

技術の世界
材料の科学
生活の科学
コンピュータの話
社会と情報の数理

デザインと生物

- ・ 授業内容を端的に表した科目名
- ・ 授業内容に対するの制約
- ・ 高校理科のリメディアル教育
- ・ 細分化された学問分野の学習

9

授業評価アンケート結果 10/16

総合的に判断して満足した

全教養科目

自然科学

積極的に取り組んだ

全教養科目

自然科学

10

科目の集約と変更（R4年度） 11/16

物理の世界 → 自然科学への扉-A

化学物質の世界 → 自然科学への扉-B

自然と情報の数理 → 自然科学への扉-C

地球と環境 → 自然科学への扉-C

生命の世界 → 生命の世界

技術の世界 → 科学技術への扉-A

材料の科学 → 科学技術への扉-A

生活の科学 → 科学技術への扉-A

コンピュータの話 → 科学技術への扉-B

社会と情報の数理 → 社会と情報の数理

デザインと生物 → デザインと生物

広範な内容の学習

科学リテラシー

授業内容の標準化

11

複数名担当科目：生命の世界 12/16

担当教員を専門分野に応じて4グループ化 → 1つのクラスを異なるグループからの3名の教員で担当

【担任担当】

第1期：生物学と環境1（生物学とは）

第2期：生物学と環境2（さまざまな動物の生存戦略）

第3期：生物学と環境3（動物の行動と社会性）

第4期：生物学と環境4（生物多様性と保存）

第5期：生物学と環境5（まとめ（グループディスカッション）とテスト）

【高単独担当】

第6期：「イントロダクション」(歴史、クラスと富山)

第7期：「富山大学」(富山の歴史、校舎)

第8期：「自然現象と変遷」

第9期：「富山県」(富山県、富山県産品)

第10期：「富山県産品」(富山県産品、富山県産品)

【副担任】

第11期：ガイダンス、履修の成り立ちについて

第12期：がんの生物学

第13期：がんの予防と診断

第14期：がんと免疫・代謝

第15期：がんの予防と診断

学生：分野を俯瞰した幅広い授業内容、複数クラスの標準化

教員：自身の強みを生かした5コマの授業

12

シラバスの共通文言 13/16

「自然科学への扉-B」

授業のねらいとカリキュラム上の位置付け（一般学修目標）
/ Course Objectives

「自然科学への扉」は、現代社会で必要となる自然科学についての幅広い知識の獲得と科学リテラシーの向上を目指す科目群です。特に「自然科学への扉-B」のねらいは、以下の通りです。

- 身の回りにあるものは化学物質から成るといふ事実を理解する。
- 化学の基礎的な知識を獲得することで、身の回りで便利に利用しているものの多くに化学物質やその性質、また化学反応が関わっていることを深める。

本授業では特に大学入学までの「化学」の習得が十分でない学生や、「化学」に対して苦手意識を持っている学生を対象に、身の回りにあふれる「化学物質」への興味と関心を高め、すこしでも好奇心を持ってもらうきっかけとなる授業を目指します。【いわゆる「理系」の学生は対象外です】。化学への「苦手意識」をできる限り減らしてもらったことを目的とするため、前向きと思われがちな【計算】や【暗記】を極力避けます。基本的な内容でも遠慮せず積極的に質問してください。知識を補うだけでなく、「ものの見方」を少しでも豊かしましょう。

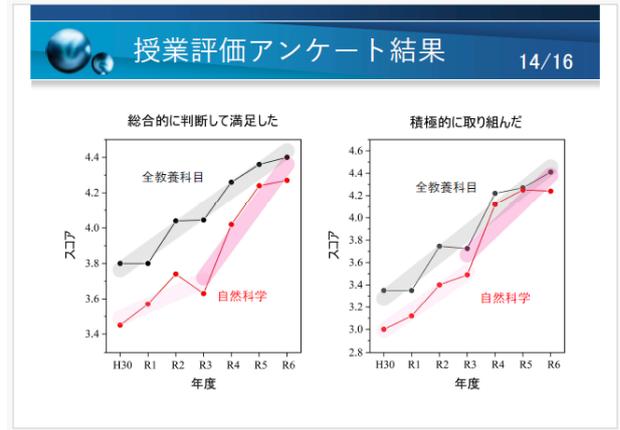
身の回りにある「もの」は基本的に「化学物質」です。生きていく上で避けがたい「化学」について両手意識を高め、すこしでも好奇心を持って視野が広がるように取り組みたいと思います。

身の回りで起こり得る事象のうちいくつかについて、化学の観点から概要を把握し、説明することができる。また、その内容について説明することができる。

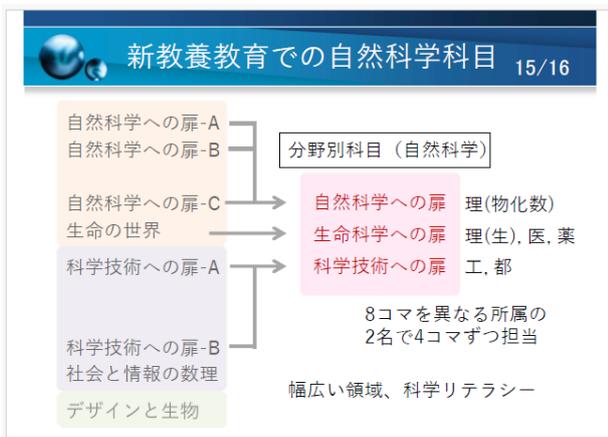
- 生命と化学との関係について、授業で扱う内容を少しでも多くの事象に関心を持って調べ、理解し説明できる。
- 生活と化学との関係について、授業で扱う内容を少しでも多くの事象に関心を持って調べ、理解し説明できる。

達成目標
/ Course Goals

13



14



15

- ## まとめ 16/16
- ・シラバスについての整理
 - 一般学修目標にDP、CPとの関係
 - 達成目標に対する評価方法と配分割合
 - ・新教養教育のシラバス
 - 授業依頼概要シート of 文言を入力
 - 複数クラス開講で共通文言
 - ・自然科学系科目でのとりくみ
 - 新教養教育のパイロットケース

16

第2部 学生を主体的な学びへと導くグループワークの実践報告

「学生の学習活動を促進させるグループワークの進め方」

安江 健一（都市デザイン学部 准教授）【資料：PowerPoint】

令和7年度第2回教養教育院FD
令和8年度新教養教育に向けた教育改革とグループワークを取り入れた授業デザイン
第2部 学生を主体的な学びへと導くグループワークの実践報告

学生の学習活動を促進させるグループワークの進め方

都市デザイン学部 准教授
安江 健一

担当科目（主にグループワークを行っている科目のみ）
教養科目：富山の地域づくり、災害救援ボランティア論
学部科目：デザイン思考基礎、地域デザインPBL
大学院科目：デザイン思考

令和7年11月14日（金）13:00～15:00

1

学生の学習活動を促進させるグループワークの進め方 について実践例を紹介

目的

- 授業で行うグループワークにおいて、学生の学習活動を促進させるための手法に関する成功・失敗の例を知る（伝える）。
- グループワークを行う際の参考にする（していただく）。

目標

- 明日から試したい・参考にしたい手法を見つける（多く紹介する）。
- ファシリテーションのスキルの存在を知る（重要性を伝える）。

2

学生の学習活動を促進させるグループワークの進め方 について実践例を紹介

内容

- グループワークを行っている科目の紹介
- 「場づくり」について
アイスブレイク、目的・目標、ルール、レイアウト、楽しく・わかりやすく
- 事例紹介

3

富山大学都市デザイン学部 教育の特長

1年 データサイエンスⅠ
2年 データサイエンスⅡ
3年 データサイエンスⅢ

1年 都市デザイン学総論
都市デザイン学の基本的な考え方や課題解決のためのアプローチ方法を身につける。

2年 デザイン思考
現実の問題の解決に学生が主体的に取り組む、問題解決能力を身につける実践演習

3年 PBL
卒業・就職
人と自然が共存する未来の理想都市

1年 地域志向科目
地域課題解決型人材育成プログラムに関する教養教育科目

2年 全学横断PBL
地域デザインPBL

3年 データサイエンス
課題解決に必要な情報の収集・分析
現在：データエンジニアリング基礎、人工知能基礎など

4

デザイン思考基礎：授業概要

- 「デザイン思考」を講義とデザイン思考の各ステップの体験を通じて習得する。
- デザイン思考の理論に加えて、実社会でデザイン思考が活用された具体例を学び、デザイン思考の必要性・有用性を理解する。

開講時期：2年次第2クォーター（6～8月）
週2コマ連続授業×8週（2単位）
担当教員：3名（3学科）（TA：6名程度）
受講人数：約160名（必修科目）
協力：外部講師

デザイン思考のステップ

大学院科目：デザイン思考
デザイン思考の一連のプロセスから実現可能かつ持続可能な問題解決策をつくり出す思考法とスキルを学ぶ。
担当教員：1名、大学院生：10～15名

聞いただけではできない → やってみること（主体的・対話的な学び）が必要

5

地域デザイン PBL：授業概要

- 専門分野の異なる学生が協働して幅広い領域にまたがる地域問題の解決に主体的に取り組み、具体的な形にまとめる。
- 専門性、創造性、計画力、問題発見・解決力、協調性、プレゼンテーション能力など幅広い能力を育成する。

開講時期：3年次第3クォーター（10～11月）
週2コマ連続授業×8週（1単位）
担当教員：12名（3学科）
受講人数：約160名（必修科目）
協力団体：自治体、任意団体、地元企業、NPO法人、大学生協等

グループワーク フィールドワーク 中間発表会 成果発表会

グループ員が協力して実際にやってみることが大切（実施の難しさ）

6

同じ日の同じ教室です



グループワークがうまくいっているかの指標

デザイン思考基礎

7

大事にしていること：場づくり

グループ員が安心して楽しく話せる環境をつくる

1. アイスブレイクを行う
2. 目的・目標を設定する（明確にする）
3. ルール（本日のお約束）をつくる
4. ふさわしいレイアウトにする
5. 楽しく・わかりやすくする

8

アイスブレイク

目的に合わせて、緊張をほぐす活動



場づくり：アイスブレイク

9

話しやすい場づくり



- ・和やかな雰囲気
- ・円滑なコミュニケーション
- ・活発な対話
- ・主体的な活動を促進

場づくり：アイスブレイク

10

アイスブレイク

- ・紹介系
- ・ほぐし系
- ・悟り系



グループワークの最初または途中に実施

場づくり：アイスブレイク

11

アイスブレイク

- ・紹介系
- ・ほぐし系
- ・悟り系



グループワークの最初に実施

場づくり：アイスブレイク

12

うそつき自己紹介

①自己紹介する内容を考える

- ・考える内容は3つ
- ・1つだけ嘘の内容にする

場づくり:アイスブレイク

13

名前

学部

1.

2.

3.

場づくり:アイスブレイク

14

うそつき自己紹介

自己紹介する内容が見つからない人へ

例:じつは私の好きな食べものは_____です。

例:じつは私は_____が得意です。

例:行ったことがある場所

アイスブレイク

15

うそつき自己紹介

②グループ内で発表・質問・予想する

- ・1人ずつ発表する。
- ・嘘を見抜く質問をする。
- ・嘘を選ぶ(教員の掛け声で一斉に)。

場づくり:アイスブレイク

16

アイスブレイク

うそつき自己紹介

目的(効果)

- ・傾聴力を高める
- ・質問力を鍛える
- ・観察力を高める

場づくり:アイスブレイク

17

アイスブレイク

- ・紹介系
- ・ほぐし系
- ・悟り系

グループワークの最初や途中に実施



場づくり:アイスブレイク

18

アイスブレイク

Good & New!



場づくり: アイスブレイク

19

Good & New!

- ① 24時間以内に起こった「良かったこと (Good)」や「新しい発見 (New)」を発表する (30秒以内)。
- ② 発表した人に対して全員で拍手する。

場づくり: アイスブレイク

20

アイスブレイク

Good & New!

効果

- メンバー同士の相互理解が深まる。
- コミュニケーションが活性化する。
- 物事の見方がポジティブになる。
- 脳が活性化する。

場づくり: アイスブレイク

21

アイスブレイク

- 紹介系
- ほぐし系
- 悟り系

グループワークの途中や最後に実施



場づくり: アイスブレイク

22

アイスブレイク

流れ星を描いてください



場づくり: アイスブレイク

23

アイスブレイク

流れ星

目的 (効果)

一方通行のコミュニケーションによって生まれる、受け手の多様性を感じる。

場づくり: アイスブレイク

24

アイスブレイク

失敗例の紹介



場づくり: アイスブレイク

25

商品名 (氏名) _____ の取扱説明書
品番 (ニックネーム) _____

商品概要 生産地 (出身) 使用場所 (お住まい)	困ったときは 症状 (調子が悪いとこうなる) 対処法 (こうすれば回復する)
主な仕様 機能① (行動範囲, 行ってみたい所) 機能② (好きなこと・趣味) 機能③ (特技・自慢)	使用上のご注意 (これをしたら危険、NGな話題など)
	関連情報 (おまけ情報など)

26

アイスブレイク

体を動かすアイスブレイクもある



アイスブレイク集の例 (FAJホームページ)
<https://www.faj.or.jp/facilitation/tools/>

場づくり: アイスブレイク

27

大事にしていること: 場づくり

グループ員が安心して楽しく話せる環境をつくる

1. アイスブレイクを行う
2. 目的・目標を設定する (明確にする)
3. ルール (本日のお約束) をつくる
4. ふさわしいレイアウトにする
5. 楽しく・わかりやすくする

場づくり: 目的・目標

28

目的・目標を設定する (明確にする)

目的

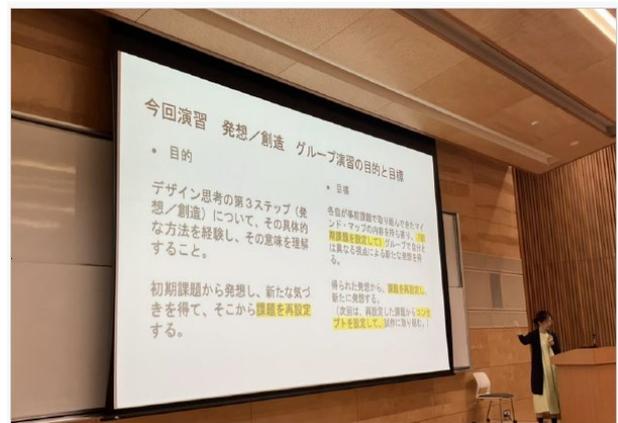
- 何のために (狙い)
- 何のためにグループワークをしているか?

目標

- 何を・どこまで、目指す姿、達成水準
- 今回のグループワークの終了時には、何が決定されていればいいか?
- 最初にゴールをしっかりと示しておく

場づくり: 目的・目標

29



30

大事にしていること：場づくり

グループ員が安心して楽しく話せる環境をつくる

1. アイスブレイクを行う
2. 目的・目標を設定する（明確にする）
3. ルール（本日のお約束）をつくる
4. ふさわしいレイアウトにする
5. 楽しく・わかりやすくする

場づくり：ルール

31

本日のお約束（例）

1. ワークごとに役割を交代して、1回の授業で必ず一つは役割を担う。
例：ファシリテーター、グラフィックレコーダー、
タイムキーパー、プレゼンター
※役割を決めない方が良い場合もあり
2. だれでも気兼ねなく話す（友達口調で話す）
3. ワークごとに必ず1回は笑う（笑顔を見せる）
4. 他者の意見を否定しない（褒める）
5. 時間を厳守できるように協力する（特定の人が長く話しすぎない）
6. 今日のワークで話した内容は口外しない

例：15分程度の
グループワーク
を繰り返す。

場づくり：ルール

32

ブレインストーミングのルール

- ・ 他人の意見を否定したり批判したりしない
- ・ 的外れでも、バカけていてもOK！
- ・ 質より量！とにかく多くのアイデアを絞り出す
- ・ 他人のアイデアに乗っかる
- ・ 適切なサイズのテーマを設定する必要がある
- ・ 実現不可能なアイデア・奇抜なアイデアも必要
- ・ アイデアの評価を早くしない
- ・ 自分のアイデアを否定しない
- ・ 視点が異なる人たちでおこなう
- ・ 全員がペンを持っている
- ・ ピザ2枚分の人数
- ・ 10～45分
- ・ ブレインストーミングは可能性を探っている段階
- ・

場づくり：ルール

33

大事にしていること：場づくり

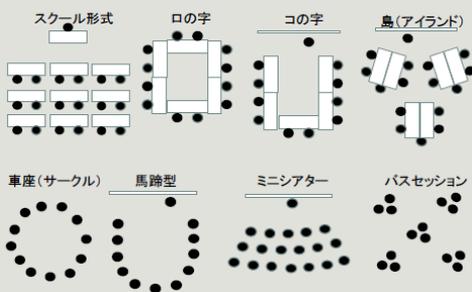
グループ員が安心して楽しく話せる環境をつくる

1. アイスブレイクを行う
2. 目的・目標を設定する（明確にする）
3. ルール（本日のお約束）をつくる
4. ふさわしいレイアウトにする
5. 楽しく・わかりやすくする

場づくり：レイアウト

34

レイアウトの例



レイアウトで雰囲気が変わる ※対決型の配置にしない
顔ぶれ、人数、作りたい雰囲気に応じてレイアウトする

35

レイアウトの例



島型 馬蹄型(扇型)
全員のアイコンタクトがとれる。全員がボードを見られる。

おまけ：島型の青色シートに注目

場づくり：レイアウト

36

レイアウトの例



「えんたくん」を使ってグループワーク

場づくり：レイアウト

37

大事にしていること：場づくり

グループ員が安心して楽しく話せる環境をつくる

1. アイスブレイクを行う
2. 目的・目標を設定する（明確にする）
3. ルール（本日のお約束）をつくる
4. ふさわしいレイアウトにする
5. 楽しく・わかりやすくする

場づくり：楽しく・わかりやすく

38

ワールド・カフェ

カフェのようなリラックスした雰囲気の中で、少人数に分かれたテーブルで対話し、他のテーブルとメンバーをシャッフルしながら対話を続ける。参加した全員の意見や知識を集めることができる。グループワークが活発になる。

- ・「ホスト役」をテーブルに残して、他の人は、別テーブルに移動する。
- ・「ホスト役」は、これまでどんな話があったかを、そのテーブルに来てくれた人と共有し、それを聞いた人は意見を述べて、アイデアを発展させる
- ・別テーブルに移動することを繰り返し、最後に元のテーブルに戻って共有する。



場づくり：楽しく・わかりやすく

39

楽しく・わかりやすくする試み



ギャラリーウォーク

シックスハット

カードゲームとふりかえり



マインドマップ

ストーリーボード

プレゼンテーション

40

教員によるグループワークの実演



- ・教員がグループワークの実演（共有・発散・収束・決定）
- ・グランドルールの必要性
- ・ファシリテーター、グラフィッカー、タイムキーパー等の重要性
- ・学生から「そんなことを言ってもいいんだ！」などの感想あり
- ・見ているだけでなく、途中からワークに参加する学生あり
- ・失敗例（収束しない）の紹介（2025年度）→ 事前の準備が重要

場づくり：楽しく・わかりやすく

41

評価のわかりやすさ

毎回「ふりかえり」を実施

なぜ、ふりかえりをするのか？

- ・良いことを確認して継続する。
- ・本当の課題と原因を見つけ、改善を加速させる。
- ・方向性を同じにして次に進む。
→ チームビルディング

方法の例

- ・ I like..., I wish...
- ・ KPT
- ・ KPTA
- ・ YWT
- ・ LAMDA
- ・ 4行日記
- ・ 体験学習モデル

場づくり：楽しく・わかりやすく

42

評価内容がわかるルーブリックを公開

(1) 【個人】 自主的である。	Y	やったことが記されていない。または、ほとんど記されていない。	やったことが普通速に記されている。	やったことが具体的に記されている。
(1) 【個人】 内容を把握できている。	W	分かったことが記されていない。または、ほとんど記されていない。	分かったことが普通速に記されている。	分かったことが具体的に記されている。
(1) 【個人】 自分の振り返りができる。	T	次にやることが記されていない。または、ほとんど記されていない。	次にやることが普通速に記されている。	次にやることが具体的に記されている。
(2) 【協働】 協力的である。	K	他者とのワークにおける良い点が記されていない。または、ほとんど記されていない。	他者とのワークにおける良い点が普通速に記されている。	他者とのワークにおける良い点が具体的に記されている。
(2) 【協働】 他者と意見交換している。	K	他者との意見交換が記されていない。または、ほとんど記されていない。	他者との意見交換が普通速に記されている。	他者との意見交換が具体的に記されている。
(2) 【協働】 他者との取り組みの振り返りができる。	P T	問題点を指摘することが記されていない。または、ほとんど記されていない。	問題点または改善することが記されている。	問題点を指摘することの記が記されている。

評価に関する具体的なコメントはフィードバックコメントに記入

43

事例: IoT カメラを用いた動物出没状況のデータ化

テーマ: 誰も取り残さない防災を実現するために私たちは何ができるか

協力団体: 砺波市栴檀山自治振興会

課題: イノシシによる農作物の被害が問題
各所に檻が設置してあるがクマが入った際には危険

取組内容

- 農作物の被害対策のためのイノシシ捕獲用の檻へ IoT カメラを設置
- 動物を感知し、LINE で通知するシステムを作成
- 捕獲した場合に即時対応が可能
- 他の動物の出没状況も分析可能
- 最終的には分析結果を住民へ報告



①データを取得し LINE で通知

44

事例: IoT カメラを用いた動物出没状況のデータ化

撮影の例: イノシシ

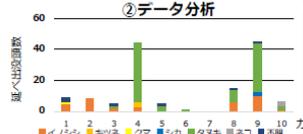
- 捕獲の他に餌を食べる様子なども撮影
- 頭数や大きさ、餌の食べ具合などを組み合わせることで対策の検討が可能

撮影の例: クマ

- イノシシ檻にクマがつかまる事例あり
- 他のクマが近くにいる恐れもあり、遠隔で檻の状況を確認できることが重要
- 副次的に熊の出没状況や冬眠時期の推定などが可能



②データ分析



①データ取得

45

- 話しやすい雰囲気をつくる (アイスブレイク、レイアウト等)
- 目的、目標を設定する
- 進め方を共有する、ルールと方針、役割
- 楽しさ、わかりやすさ、安心感
- 傾聴→安心感・信頼感
- 情報や意見を引き出す
- 評価しない、助言しない

場のデザイン **対人関係**

ファシリテーションスキル

- 配置に気を配る
- 非言語メッセージ

構造化 **合意形成**

- 図を使う
- 全体像がわかる
- 多様や視点を与える
- 情報をまとめる
- 分かち合う
- 本音を探る、じっくり感

ファシリテーション:
学生の学習活動がうまくいくように支援し、学びが深まるように舵取りする

46

「グループワークの input と output」

大西 宏治 (人文学部 教授) 【資料：PowerPoint】

令和7年度第2回教養教育院FD (2025.11.14)
第2部 学生を主体的な学びへと導くグループワークの実践報告

グループワークの inputとoutput

人文学部 教授
大西宏治
担当科目：富山の地域づくり (総合科目)

1

この報告のねらい

- ワークショップ型の授業が有意義になるためにやるべきことは？
- 対話の理念をあらかじめ学生に理解してもらうこと
- 学生に自身の特徴を考える機会を持つこと
- 主体的な学びを行うワークショップでは話し合いの技術だけではなく、知識のinputと対象へのまなざしの持ち方 (リフレーミング) を示すこと

上記に関して総合科目「富山の地域づくり」の紹介を通じて理解してもらいたい

2

1. これまでの授業の紹介

3

総合科目「富山の地域づくり」

- もともと総合科目「現代文化」からスタート
- 富山市とまちづくりの取り組みをする中、「富山市のことを授業で紹介したい！」という富山市の若手職員の声から始まった (2007年度)。
↓その後
富山県や高岡市、魚津市、北陸地方整備局など包括協定を結ぶ団体からまちづくりについての授業を受け入れた

4

100のレジリエントシティ ワークショップ

- 2018年に富山市未来戦略室が設置され (現在のスマートシティ推進課の前身)、ロッキフェラー財団の支援を得て人材を派遣することができるため、人を派遣してもらいワークショップを実施することに

2018年の授業の内容	
第1回	オリエンテーション
第2回	社会資本とまちづくり (北陸地方整備局)
第3回	富山県の地域づくり (富山県)
第4回	富山駅と中心市街地の離れぬ劇出 (都市政策課)
第5回	レジリエントシティとしての富山市のまちづくり (富山市未来戦略室)
第6回	富山市の中心市街地のフィールド授業 (1)【グランドツアー】
第7回	富山市の中心市街地のフィールド授業 (2)【富山駅周辺散策】
第8~12回	RC100のワークショップ
第13回	高岡市の取り組み
第14回	魚津市の取り組み
第15回	立山黒部ジオパークの取り組み

5

日時：2018年6月17日 (日) 9:30 集合 (解散は17:00)
場所：共通教育棟 D21
スクリーン：(タイムキーパー 大西先生)

時間	項目	担当
9:30-10:00	集合	全員
10:00-11:00	開会およびオリエンテーション	未来戦略室
	質疑応答	観光政策課
11:00-11:30	アクティビティ 1: ユーザープロファイル	全員
11:30-12:15	アクティビティ 2: 富山の強みや課題など	全員
12:15-13:20	ランチ	
13:20-14:10	アクティビティ 3: 富山の可能性	全員
14:10-15:30	アクティビティ 4: 可能性の探求と実行	全員
15:30-16:00	オリエンテーション	各グループ
16:00-16:15	報告発表 (1 時から 3 時まで)	審査員
16:15-16:30	開会および解散	観光政策課、100RC
16:30	全体写真	全員

ワークショップは4コマ分で実施。変則の集中講義を行っていた。

シラバスで日程を示した上で、この日に参加できない場合、履修は不可とした。欠席した場合も単位を認定しないことを理解した学生が受講。

グループは名簿順に機械的に指名している (学部混在、コンソーシアムの場合、大学混在)

このワークショップに当たり、富山市のまちづくりへの取り組みの理解が重要

6

富山の未来を考えるためのデザイン思考

富山に暮らす人々の未来を共に創る！

名前: Rui Fried / 山本 麗子
年齢: 35歳 / 35歳

2019年の資料

ペルソナを設定し、それぞれの立場の富山市での暮らしを考えてみる

富山市の資料を一部改変

7

Design Thinking for Urban Resilience (都市のレジリエンス構築のためのデザイン思考)

平野 浩一 (Hiroki Hirano) のワークショップ

「どのようにOOしたいか?」「どうすればOOできるか?」

2019年の資料

考え方、発想法を体系的に取得する

富山市の資料を一部改変

8

2. 富山の未来共創を体験

9

富山市のスマートシティ推進課と協働

2025年度前期 (大学コンソーシアムの授業・夏季集中)

第1日目 (9/3) 場所 富山大学

- オリエンテーション
- 1限 第1回 オリエンテーション: まちづくりとは (担当: 大西宏治)
- 富山で活動する企業や団体の取り組み
- 2限 第2回 立山黒部ジオパーク協会の取り組み (都市デザイン学部 安江健一)
- 3限 第3回 富山県における農業振興 (富山県)
- 4限 第4回 富山の農業の課題を考えるワークショップ

第2日目 (9/4) 場所 富山大学

- 富山市の取り組み
- 1限 第5回 富山市の中心市街地活性化の取り組み (まちづくり推進課)
- 2限 第6回 富山市の公共交通 (交通政策課)
- 3限 第7回 選ばれるまちづくり (広報課)
- 4限 第8回 富山市の文化芸術振興 (文化国際課)

10

グループワークはアウトプットを!

第3日目 (9/5) 場所 富山大学

- 富山のこれからを考えるワークショップ (スマートシティ推進課) 8:45~16:15
- 第9回 富山のこれからを考えるワークショップ (1): スマートシティの取り組みと未来共創
- 第10回 富山のこれからを考えるワークショップ (2): ビジョンと共感
- 第11回 富山のこれからを考えるワークショップ (3): リフレーミングの体験
- 第12回 富山のこれからを考えるワークショップ (4): イノベティブなアイデアを考える

第4日目 (9/6) 場所 富山大学

- ワークショップ発表会
- 第13回 ワークショップまとめ 8:45~10:15
- 第14・15回 発表会と相互評価 10:30~12:00, 13:00~14:30

11

ワークショップの設定

■最終課題:

社会の困りごとを取り上げ、どうすれば当事者として関わられるかを提案すること。

■前提

- 富山県や富山市の施策を学び、自分たちの困りごとへの行政の取り組みを知識として吸収
- 対話を通じた主体的な学びを行う

12

ワークショップの概要

「未来共創」の定義

みんなで 未来を共に創る

仲間づくり

対話・共感

未来共創

富山市の資料

13

ワークショップの概要

富山市の資料を一部改変

やること

STEP 1 立場を越えた対話を重ねる
アイスブレイク
グループ対話
余話・対話・議論の違いを認識

STEP 2 理想の未来 (ありたい姿) を描く
未来ビジョン共有、バックカasting
シーンスケッチ
グループ対話

STEP 3 理想と現実のギャップから課題を見つけ、その課題を再定義 (ジブンゴト化) する
課題のリフレーミング (再定義)
グループ対話

STEP 4 課題解決のアイデアを考える
アイデア検討

14

STEP2 理想の未来(ありたい姿)を描く
描き方とポイント

- ①スケッチ部分
絵のクオリティを競うものではありませんので
恥ずかしがらずに書きましょう！
ここには「アイデア」ではなく、「状態」を描いて
ください(〇〇になる、〇〇できる)
- ②シーンタイトル部分+補足説明部分
こちらから先に埋めていくとスケッチがしやす
いかもしれません。難しい場合は「とやま未来共
創ビジョン1.0」やシーンスケッチの例を参考にし
ていただいても構いません。
- ③現在の暮らし(現状)
「理想が実現した状態(=未来)」と比較して
「今の状態(=現在)」がどうなっているかという
事実を書いてください。
解決策を考えるのではなく、あくまで「現在起き
ていること」にフォーカスします。

15 富山市の資料を一部改変 TOYAMA CITY

15

STEP2 理想の未来(ありたい姿)を描く 富山市の資料を一部改変
描き方とポイント

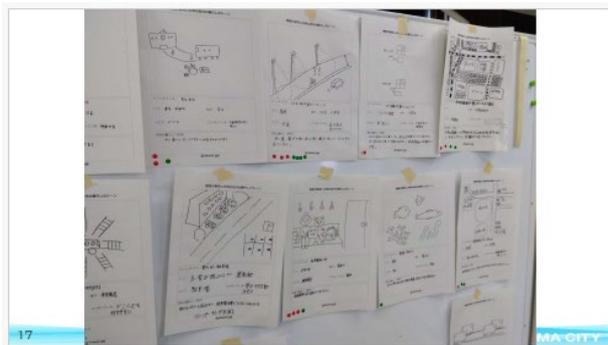
絵のクオリティはこのぐらい、むしろ
これ以下でも全然問題ありません！

考え方・発想を学ぶ
理想の姿
× ●●がある
○ ■■を楽しめる。
そのために●●が必要

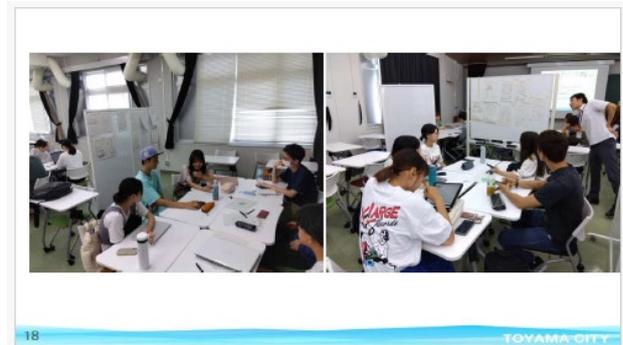
ROUND1ができる(あること)
⇒これは何かの理想を実現するための
手段(アイデア)です。
⇒ROUND1ができることは誰に
とって(自分にとって)どんな理想が
実現されているのでしょうか？
⇒例えば「富山市内の遊びの選択肢
が増える」とか、「天候を気にせず街
を楽しむことができる」などが理想
が実現した状態です。
(ROUND1はその理想を実現する
ためのアイデアの1つ)

16 TOYAMA CITY

16



17



18

学生の発表(抜粋)

19 TOYAMA CITY

19

富山のこれからの考える
ワークショップ 発表資料

富山まつりwith富大祭

グループ名: C
メンバー: 中島人貴 高田寿江 渡邊天太 辻和香奈 栗明里 宇野志遠 石原翠姫

20 TOYAMA CITY

20

1. 実現したい理想のまち・暮らし

私たちグループcが実現したい理想のまちや暮らしは、

地域、年齢問わず人が集まれるイベントがある暮らし

21 TOYAMA CITY

21

1. 実現したい理想のまち・暮らし

この企画でハッピーにしたい人はこんな人です。

名前: 年齢: 13、4くらい
性別: どちらでも 居住地: 北陸
出身地: 問わない 家族構成: 祖父母、父母

大切にしている価値観: 年齢層関係なく関われるイベントに
参加したい

22 TOYAMA CITY

22

3. 実現したい理想のまち・暮らしとのギャップ、ハードル(課題)

実現したい理想のまち・暮らしと現在を比較すると

- ・規模が大きい祭り(イベント)が少ない
- ・祭り(イベント)の数が減ってしまっている
- ・年齢,居住地問わず、認知され参加できる祭り(イベント)が
すくない
- ・街中での祭り(イベント)が少ない

23

4. 理想実現のために解決すべき課題

- ・年齢,居住地問わず、
認知され参加できる祭りがすくない

こと

24

5. 再定義した課題(=問い)

ひとつのイベントで年齢問わず多くの人を集めるにはどうすればいいか？

幅広い年齢に人気のイベント
...紅白歌合戦、甲子園、etc

こんなのを新しく作るのは無理



25

富山まつり

9/20(土)・21(日) 富山のよさこい祭り(城址大通り)

9/20(土)富山県若衆会 伝統芸能披露(城址大通り)

26

富山まつり

富山まつり	
年	観光客入込数
R3	甲正
R4	170,000
R5	190,000
R6	公表なし

約180,000人が参加する

皆さん知っていましたか？



引用 富山観光推進機構

27

6. 企画アイデア



コラボレーション



28

6. 企画アイデア



- 集客力 高
- 世代集客力認知度 高
- 集客力 若者認知度 高
- 世代(大学生)認知度 高
- 双方に大きな利点がある！！

29

コラボレーションのハードルの低さ

- ・初期費用 0
- ・富大祭の日程変更だけでよい
- ・参加者の合計総数が減ることがない
- ・改善点が明確
- ・日程変更のみのため、失敗時に改善しやすい

30

ステークホルダー (実現に欠かせない関係者)	役割(何をするか)
地域の方	参加
私たち(学生)	交渉 参加 PR
富山市観光協会	運営 PR
大学	許可

31

まとめ OUTPUTの重要性

32

主体的な学びの仕組み

- 授業でのinput (富山での自治体のまちづくり)
inputの受け止め方は多様である
↓対話
多様な受け止めを交換して地域課題を共有
↓リフレーミング
課題を自分でも着手できるものへ (自分ごと化)
↓発表できる形態へ
output

33

OUTPUTがあるからこそ

- 対話して意見交換
→対話だけでも価値はあるが、本気の対話まで昇華させたい
- 発表会 (putput) が重要 (負荷をかける)
→グループで発表が対話を本気のものにさせる

この授業がうまくいったかどうかの大西の個人的な指標

1. 発表準備の後、グループでご飯に出かけた
2. 授業が修了したあとも何らかの交流が続いていく

34

悩み

- どうやって8回の授業に落とし込めば良いのだろう？

35

(2) 講演当日の様子

当日は、対面とオンライン (Microsoft Teams) を併用したハイブリッド形式で実施しました。本FDは教養教育院という一部局が主催するものではありませんでしたが、オンラインでの参加も含め、複数の学部の教員が参加し、質疑応答では次年度の授業運営を具体的に想定した質問やグループワークにおける授業の運営方法に関する具体的な質問が挙がるなど、活発な意見交換が行われました。

4. 講師への追加質問とその回答

第1部 新教養教育の理念およびシラバス

「新教養教育の全体像としくみ：部会からチームへ」

【質問1】

科目チーム内で共有・工夫をしながら、より良い教育に繋げていくというお話がありましたが、その「共有の方法」については、各チームの状況に応じてチームごとに任せる形になりますでしょうか。或いは、最低限このように行ってくださいというような共通の方法等設定されますでしょうか。

【回答1】

将来的には、情報共有の場や、情報共有を促すしくみを教養教育院が主体となって作ることが理想と考えています。一方で、そういったしくみができる前から教員間の連携がある方が望ましいので、来年度の分担者が固まった時点で分担者の情報を共有するなどして、横の繋がりを作れるような工夫も考えていきます。

【質問2】

それぞれの科目でチームを3程度作って、そのチーム内教員で授業を回す、ということですが、そうするとチームの人数の差が負担の違いを創出しています。労働の均等化についてはどのようにお考えですか？

【回答2】

「それぞれの科目でチームを3程度」というのは、「1つの大括り科目の中にサブタイトルが複数ある」という図の中で、サブタイトルを3種類例示した点をそのように捉えられていたものと推測します。チームは大括り科目ごとにつくるので、1つの科目ではチームは1つでその中に複数のサブタイトル科目の担当が含まれます。一方で、このようなしくみでもチーム(科目)ごとに人数が異なることから、ご質問のように「負担の違い」は生じるように見えますが、実際にはすべての科目を同じ数開講するわけではないので、単純にチーム人数によって「負担の違い」が生じるとは考えていません。また、そのような点も配慮しながら全学の教員が教養教育に適切に貢献していけるしくみを構築したいと考えています。

「新教養教育科目のシラバスについて」

【質問3】

「授業依頼概要シート」が作成され、それをもとにシラバスを執筆していく場合でも、同一科目はこれまで通り基本的にシラバスの記述は統一にするという理解でよろしいでしょうか。つまり、「授業依頼概要シート」で示された内容の範囲内であれば、同一科目間で記述にばらつきがあっても良いということにはならないということよろしいでしょうか。

【回答3】

授業依頼概要シートの内容を元に、各科目のシラバスの「授業のねらいとカリキュラム上の位置づけ(一般学修目標)」、「達成目標」、「成績評価の方法」を用意していますので、それをそのまま転記していただくこととなります。それに加えて、各授業について記述すべき情報があれば追加で記入して下さい。

第2部 学生を主体的な学びへと導くグループワークの実践報告

「学生の学習活動を促進させるグループワークの進め方」

【質問4】

グループワークに関して「楽しく、わかりやすく」といった文言がありました。「楽しく」というのがどういう状態であるのかは講演の内容からよく伝わってきましたが、「わかりやすく」というのが、学生どうしでのアウトプットに関して言われるのか、授業内容に対して言われるのかがよくわかりませんでした。

【回答4】

説明不足であり、失礼しました。「わかりやすく」については、「学生同士でのアウトプット」と「授業内容」との両方に対して必要だと考えていますが、本FDでは主に後者の「授業内容」について紹介しています。授業で教員が口頭や図表でグループワークの進め方やファシリテーションの必要性を説明しただけで、すぐに学生が実践するのは困難だと思います。そこで教員が実演することで、学生はイメージしやすくなると考えています。実演が、うまくできても、できなくてもどちらも参考になるようです。なお、最近は高校でグループワークなどに慣れている学生が増えており、すぐにうまく実施する場合がありますが、慣れていない学生も含めてグループで最大の成果がでるように進めていくことの大切さもわかっていただくことが大切だと思います。

その他、ルーブリックで評価内容を事前に示しておくことで、授業内容として何が大切かを理解して取り組めるようにしています。また、前の回の振り返りでよかった内容を共有していますが、これも授業内容のわかりやすさにつながると思います。

「学生同士でのアウトプット」でのわかりやすさについては、説明できませんでしたが、模造紙に積極的に記録することを心がけてもらったり、絵を使ってもらったり、「わかりやすい日本語」を意識して使ってもらったりしています。

【質問5】

グループワークにおいて「安全な場・安心の場」を作ることが大切だというお話で、特に協力して活動することが苦手な学生がいる場合には、ケースによって異なるとは思いますが、どのように対応していくのが良い等ございましたらご教示ください。

【回答5】

ケースによって異なることから、柔軟な対応が必要だと思います。このケースに限ったことではないですが、一般の場合でも自己開示が多いワークやアイスブレイクは避けた方が良いと思います。また、発言しづらいような場合は、クローズドクエスチョンから始めて、オープンクエスチョンへと進めると良いかもしれません。話すことが苦手な場合は、書記として活躍していただくなど役割を決めることも有効かもしれません。また、沈黙も重要ですので、急かすことなく進めることも大切です。協力して活動することが苦手な学生が少しでも関わるができる「場」を工夫して作っていくことが必要だと思います。

「グループワークの input と output」

【質問6】

インプット・アウトプットのやり方も含めた重要性について理解いたしました。インプットを与える際、リフレーミングと併せて、さらにどの程度インプットを与えるのが良いか等ございましたらご教示ください。つまり、インプットをやりすぎると学生の考える方向性等をコントロールしすぎないか等、いつも内容を組み立てるときに悩んでしまいます。

【回答6】

インプットについては、考えるための参照枠と知識と双方が必要になりますが、その提示の仕方や提示した知識の内容がそのままアウトプットにつながるのではないかという懸念があるということでしょうか？インプットの内容ではなく、アウトプットの出すときの課題・問いに多様性があれば、インプットの内容だけで学生の思考をコントロールしてしまうことにはならないと思います。

5. 令和7年度第2回教養教育院FD参加状況

「令和8年度新教養教育に向けた教育改革とグループワークを取り入れた授業デザイン」

【当日参加者内訳(会場・オンライン参加)】

教員	
役員	1
教養教育学系	13
人文科学系	1
社会科学系	1
都市デザイン学系	4
工学系	6
医学系	4
薬学・和漢系	1
教育研究推進系	2
小計	33

職員	1
----	---

非常勤講師	0
-------	---

合計	34
----	----

【オンデマンド参加者内訳】

教員	
教養教育学系	5
人文科学系	1
教育学系	4
理学系	1
工学系	10
医学系	3
教育研究推進系	3
小計	27

職員	0
----	---

非常勤講師	0
-------	---

合計	27
----	----

総計	61
----	----

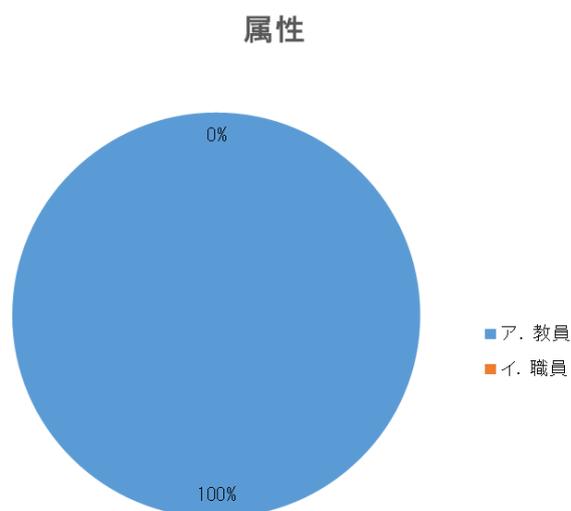
6. 令和7年度第2回教養教育院FD参加者アンケート集計結果

FD参加者数：61名

(内訳：教員60名，職員1名)

アンケート回答者数：39名

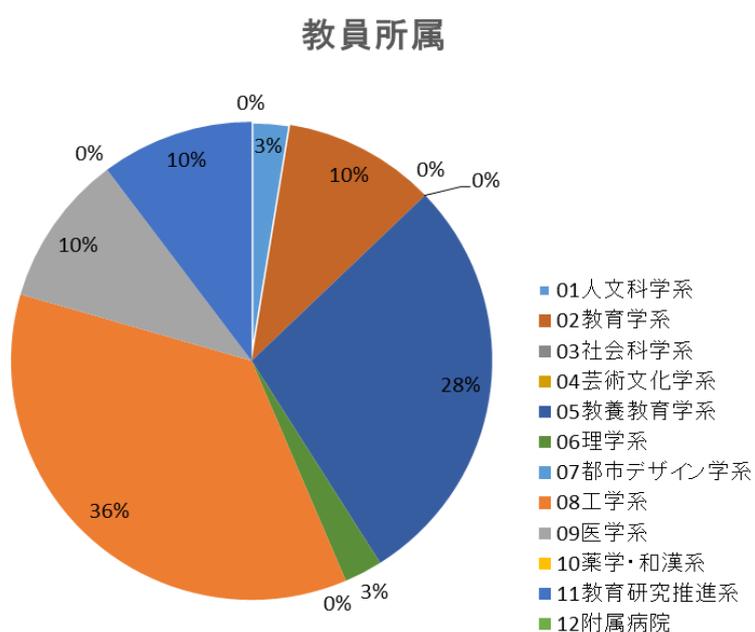
1. 属性を選んでください。



属性

ア. 教員	39
イ. 職員	0
計	39

2. 所属を選んでください。(教員のみ)

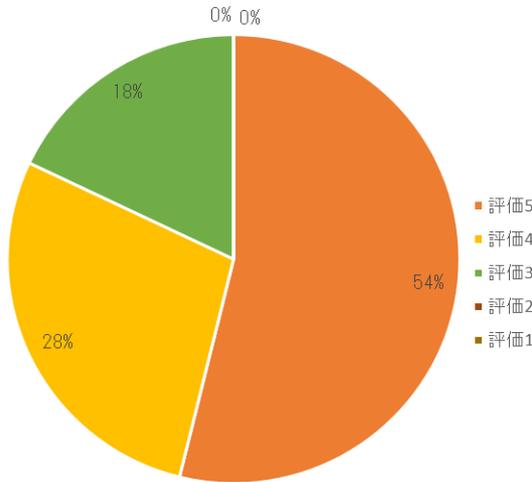


教員所属

01 人文科学系	1
02 教育学系	4
03 社会科学系	0
04 芸術文化学系	0
05 教養教育学系	11
06 理学系	1
07 都市デザイン学系	0
08 工学系	14
09 医学系	4
10 薬学・和漢系	0
11 教育研究推進系	4
12 附属病院	0
計	39

3. 今回の教養教育院FDに参加しての評価を5段階評価で入力ください。

今回のFDに参加しての評価



今回のFDに参加しての評価

評価5	21
評価4	11
評価3	7
評価2	0
評価1	0
計	39

4. 今回の教養教育院FDについての感想やご意見があれば、ご記入ください。

- ・第一部講演では、来年度の科目グループの仕組みを明確にしてください助けになりました。第二部講演では、安江先生が失敗例を組み込んでさまざまな実践を示して下さったことが重要だと思われました。また、大西先生の取り組みについては学生が意欲的に取り組んでいる様子がうかがえ、参考になりました。
- ・教養教育改革、新しいシラバス、グループワークの方法や実践例について、非常に分かりやすくご講演ください、大変勉強になりました。講師の先生方には、心より御礼申し上げます。
- ・他に予定があつて始めの1時間しか参加できませんでしたが、すぐに Teams に動画を挙げて下さり、講演の続きを「すぐに」聞くことが出来ました。良かったです。GWの方法・工夫ということでいろいろ教えていただきましたが、他のところにも応用できそうで大変参考になりました。
- ・今後の教養教育のチーム制に関して理解が深まりました。シラバスについても科目枠で共通な部分とサブタイトルごとに個別に書いてよい部分が理解できた。
- ・場の作りかた、アイスブレイクなどについて学ぶことができました。ありがとうございました。
- ・具体的な事例紹介が大変参考になりました。
- ・大西先生のご発表で output の重要性につき改めて考えることができました。授業時間内で成果を作ることが output の一つであることはもちろんですが、その output を該当授業外でどのように学生が活かしていくのか、を考慮して授業の方策を構築することが大切であることに気づきました。今後の授業に役立てたいと思います。
- ・新しい教養教育の全体像やしくみの理解が進んだ。
- ・授業数のアンバランスが是正されるのは良いが、そもそも担当可能な分野の教員数と授業数が合っ

いないためにアンバランスが生じているのではないか。アンバランスをなくするために専門外の分野を担当させられるのは論外であり、授業の質低下につながるのを避けるべきと考える。

- ・ いろいろな授業展開の仕方があることがわかった。これからもいろいろな学生が興味関心がわくような授業設計をがんばっていきたい。今回はありがとうございました。
- ・ 前半の教養の改革については、よく考えていると思うしこの路線でも良いと思うが、大学側が学習の方向性やテーマを与えて、それに沿った学習に偏らせるのは、専門学校のように、学生の興味や視野を狭めている気が、あるいは、過保護な気がする。開講する内容はできるだけ多岐多様なものにして、学生が自ら作った修得したいテーマに沿って授業を取れるようにしたほうが良いように思う。入れたからたまたま来てしまった大学ではなくて、やりたいこと学びたいものがあるからこの大学に来たのだとなればよいと思う。教える方はあまりやりたがらないかもしれないが、基礎学力や常識も必要であるから、そのようなものも取り揃えておくべきだし、その部分は必修にすべきとも思う。年々、必要な教養の単位が減る中で、制限がどんどんきつくなってきて、ほぼ必修みたいなのは面白くないんだろうなと学生を見ていて思う。
- ・ 後半のグループワークなどは、授業の時間をよく割けるなど感心させられるし、発表している先生は凄いと思う。でも、いつのFDでの説明でも、学生が雑談をしているだけで、何か新しいものを発見したつもりになって、結局はどこかにある情報を知っているかどうかの違いだけで、最後にはAIのまとめみたいな回答を提出してやった気になるっていう感じが、どうも気に入らない。ブレインストーミングとはいうけれど、創造的なアイデアなんて、すぐに出るわけないと思うし、出てくるならそれは既にどこかにある、その場にいる人たちが気付かない情報に過ぎないと思う。ファシリテーターが解決策に結びつく情報を持っているかどうかにかかっていると思うし、持っていれば、その方向にどうしても誘導しようとするだろうし、持っていなければ、適当な概念にカタカナを振って、あたかも新しいことを発見したかのように学生に説いて、教育という名のハラスメントを学生にする。本当に創造的なアイデアを引き出すには、時間が必要で、問いの質が重要だと思う。きっかけや方法を教えるだけだという考え方もあるが、そうであれば方法論を講義すればよいだけのことだし、結論に達しないテーマをわざわざ授業で実践する必要性を感じないし、学生のトラウマになるだけでは。
- ・ 学生実習があったため、当日参加できずにすみませんでした。
- ・ 教養教育の充実が進学した専門外の事も学べるという大学の魅力にもなるのだろうと思いました。
- ・ 私が大学生のころ単位稼ぎのためと真剣に取り組む気にならない薄い内容でしたが、充実した講義をこれから受けられる学生は恵まれていると思います。
- ・ 教養教育改革、シラバスの考え方、アイスブレイク、グループワークの実践例など、大変役立つ情報を得ることが出来た。グループワークを実践する上で、配慮が必要な学生への対応の難しさも同時に痛感した。
- ・ 大変参考になりました。安江先生、大西先生のご講演では、どのように学生さんたちに会話をさせたり、ブレインストーミング、ディスカッションをさせたりするのかという点に、さまざまな工夫がなされており、感心いたしました。各学生さんの意見を引き出し、それを相互に交換しあい互いに影響しあうように導くことはなかなか難しいと思います。各先生方の長年の経験に基づかれた工夫があり、非常に勉強になりました。
- ・ グループワークのあり方について、具体的に示してくださったのがありがたく、たいへん参考になっ

た。効果的なグループワークにするために工夫する余地は様々あると実感できたので、自身でも検討してみたい。

- ・第2部の具体的な事例が特に勉強になりました。
- ・ありがとうございました。

5. 今後、教養教育FDで取り上げて欲しいとお考えのテーマがあれば、ご記入ください。

- ・今回のように、授業の工夫をされている様々な分野の先生方の授業例を紹介するFDが定期的にあるとよいと思います。
- ・英語が苦手ですが、英語で講義をしたいという気持ちがあるのですが、どのようなトレーニングをすればよいでしょうか。ただちに英語を勉強してではなくて、なにかAIでもつかって上手にできる方法を研修したいです。よろしくお願いいたします。
- ・ロールプレイのスキル研修

6. アンケート結果のまとめ

「今回の教養教育FDについての感想やご意見」の記述欄からは、本FDが新教養教育（制度・シラバス）に関する理解の促進と、グループワークに関する具体的な実践知の獲得の両面で有益であったことが窺えます。

まず、第1部（「新教養教育の理念およびシラバス」）については、「来年度の科目グループの仕組みが明確になり助けになった」、「教養教育改革、新しいシラバス、グループワークの方法や実践例について、非常に分かりやすく、大変勉強になった」、「今後の教養教育のチーム制に関して理解が深まり…シラバスについても理解できた」といった声が複数見られ、教養教育改革の全体像、シラバス作成や運用のポイントが具体的に整理され、次年度（令和8年度）に向けて取り組むべき点が明確になったと思われます。新教養教育の設計に関しては、「私が大学生のころ単位稼ぎのためと真剣に取り組む気にならない薄い内容でしたが、充実した講義をこれから受けられる学生は恵まれている」という意見に代表されるように、今回の教養教育改革によって授業内容が質的に充実し、学生にとって学ぶ価値の高い授業が提供されることへの期待がうかがえます。一方で、「改革の路線自体は良いが、大学側が学習の方向性やテーマを与えて偏らせるのは過保護で、学生の興味や視野を狭めるのではないか」、「開講内容は多岐多様に揃え、学生が自らのテーマに沿って授業を取れるようにした方がよいのではないか」といった意見が見られ、必修科目の配置による学修の枠組みを示すことと、学生の自己決定や選択の自由のバランスをどのように設計するかが、今後の説明・運用の重要な論点であると思われます。

次に、第2部（「学生を主体的な学びへと導くグループワークの実践報告」）に関しては、「場の作りかた、アイスブレイクなどについて学ぶことができた」、「具体的な事例紹介が大変参考になった」「効果的なグループワークにするために工夫する余地は様々あると実感できたので、自身でも検討してみたい」など、各人の授業でも実践に移してみようという意欲がうかがえるコメントも見られました。中でも「失敗例を組み込んでさまざまな実践を示したことが重要だと思われた」というコメントは象徴的で、授業の現場で起こり得る困難をあらかじめ共有されたことが、参加者の理解を深め、授業への応用可能性を高めたと考えられます。また、「学生が意欲的に取り組んでいる様子がうかがえた」という声もあり、参加者にとって、今後自らの授業でも実践してみようという意欲の喚起につながったと考え

られます。その一方で、「学生が雑談しているだけで何か新しいものを発見したつもりになる」、「最後はAIのまとめのような回答を提出してやった気になる」といった見方や、「創造的なアイデアを引き出すには時間が必要で、すぐに出るわけではない」、「結論に達しないテーマを授業で実践する必要性を感じない」といった意見もありました。これはグループワーク自体を否定するというよりも、準備や設定が不十分なまま実施した場合に、十分な学習効果が得られないのではないかという懸念を示したものであると思われます。ただ、創造性やその学びは、個人の努力だけでなく、環境や条件の設計、問いの設定などの影響も強く受けるということを意識し、グループワークの価値を“話し合いをしたかどうか”ではなく、“学びが生まれる条件を整えられているか”という発想で、授業を運営する教員がデザインしていくことで、これらの課題が少しずつ解決していくかもしれません。